

# だれかのために第一歩

「だれかのために何かできないだろうか」。東日本大震災以降、その口にする人が増えた。真っ先に頭に浮かぶのはボランティア。だけど、どこで何をすればいいのかわからない、という人もいるのでは。そこで、県内の何組かに登場してもらった。彼らは教えてくれる。大切なのは、気負うことなく自分ができることをできる範囲でやることだと。心の絆を結びロープを手にしたあなたの、第一歩を踏み出すきっかけにしてほしい。



宮城県南三陸町の小学校のグラウンドで、集まった被災者に支援物資を渡す近藤さん(中央)

## 新居浜市民の会 被災地支援 つぶやきから

「がれき撤去に4トトラックと重機あり。ボランティアできること少ないですか」

東日本大震災の被災地支援を続ける「新居浜市民の会」の始まりは、昨年4月に同市立川町、近藤千早さん(68)がツイッターでこうつぶやいたことからだった。

テレビに映し出された3・11の映像に衝撃を受け、何かできることはないかと知り合いの災害ボランティアネットワーク会議の委員に相談した。しかし「今は団体の受け入れしかしていない」。

「あれだけ甚大な被害が出て、つぶやきに要望をすくい上げられるわけがない」。2004年の台風災害で仮設住宅での避難生活を経験していた近藤さんは、公共機関だけでは手が回らないことを身をもって知っていた。

昨年5月の大型連休、活動先が決まらないまま東北に向け夫婦で出発する直前、つぶやきに返答があった。「うちに来ませんか」。被災者の緊急避難所だった岩手県一関市、洞雲寺の和尚からだった。

以降、6、8、10月と、がれき撤去や救援物資を届けに現地へ。回を重ねるごとに新居浜では支援の輪が、東北では被災者やボランティアとのネットワークが広がり、行政の手が届きにくい小集落の被災者ニーズにピンポイントの支援を続けている。

12月15、18日、市民の会の4人は、松山市から駆け付けた協力者4人と、宮城県気仙沼市や南三陸町で5度目の活動。近藤さんと同じく台風で被災した新居浜市立川町の女

性有志立川ガールズ(約10人)などは、暖房用品など大量の物資を段ボール約300箱に仕分けし「がんばり過ぎないでください」などと被災者へのメッセージを添えた。

「顔の見えるボランティア」の意味は大きい。吹雪の東北道まで一昼夜22時間かけ、段ボール山積みの上トラックを交代で運転する伊藤彰浩さん(44)は「野菜や毛布を手渡すと、心しづからの感謝が返ってくる。あれを感じたらまた来ようと思」。誰に、何を渡し、どんなふうに喜んでくれたか、新居浜に戻り、伝える話はいきおい熱いほくなる。

ボランティアを受け入れるのもボランティアだ。気仙沼市の菅野和孝さん(49)と二代さん(48)夫婦は、カキ養殖のいかだや自宅が津波被害を受けながら、地域のために宿泊場所や食事を提供している。がれき撤去などで交流のある市民の会は、今回この活動を拠点にした。

松山市の大山、山内高司さん(54)が、ボランティアに対する菅野夫婦のあまりの歓待ぶりに首をひねった。「どうしてそこまで人に優しくできるのか」。一代さんはほほ笑む。「自分たちだけではどうしようもない、こんな震災に遭ったら、多分あなたも分かると思う。来てくれる人、みんな福の神だっつて」。

近藤さんは面ほゆい。「神さんなんもか。一人一人の人間がみんなでやりよるのよ。悔しいけど復興への何万分の1。それでも一歩ずつでも前に進めたらと。それだけのことよ」。

### メッセージ

「箱根山、かこに乗る人、担ぐ人、そのまたわらじを編む人」じゃないが、それができることをやればいい。私は地元公民館を拠点に救援物資を募り、広報や事務手続きなど裏方をやった。震災支援はみんな何かしたいと思ってるだろう。それを行動に移すきっかけがあるかどうか。私には、先頭で一歩踏み出す男がいた。

(新居浜市民の会 杉本貞泉さん)

(秀野太俊)